

氏名（本籍） スマ タ ヒロ ユキ 沼田 宏行（神奈川県）
 学位の種類 博士（音楽）
 学位記番号 博音第26号
 学位授与年月日 平成8年3月25日
 学位論文等題目 <演奏曲目> ドビュッシー作曲「Images」他
 <論文> ドビュッシー《練習曲集》の原典研究と演奏解釈に
 基づく校訂
 -再現芸術における楽譜の信頼性と可能性-

論文等審査委員

（総合主査）	東京芸術大学	教授	（音楽学部）	辛島輝治
論文審査会（主査）	”	”	（ ” ）	船山隆
（副査）	”	”	（ ” ）	佐藤真
（ ” ）	”	”	（ ” ）	辛島輝治
（ ” ）	”	”	（ ” ）	坪田昭三
（ ” ）	”	”	（ ” ）	堀江孝子
（ ” ）	”	”	（ ” ）	田邊緑
（ ” ）	”	”	（ ” ）	小林仁
（ ” ）	”	”	（ ” ）	米谷治郎
演奏審査会（主査）	東京芸術大学	教授	（音楽学部）	辛島輝治
（副査）	”	”	（ ” ）	坪田昭三
（ ” ）	”	”	（ ” ）	堀江孝子
（ ” ）	”	”	（ ” ）	田邊緑
（ ” ）	”	”	（ ” ）	小林仁
（ ” ）	”	”	（ ” ）	米谷治郎

（論文内容の要旨）

本研究は、修士研究により得られたドビュッシーにおけるピアノの重要性をもとに、デュラン原典版、新ドビュッシー全集版、ヘンレー新版、音楽之友社版、ドビュッシー校訂によるショパンの《練習曲集》、ドビュッシーの自筆稿、作業稿、自筆稿断片の検討により、ドビュッシーの作品をより正確に理解し、楽譜の正確さと可能性について考察しようとするものである。

第1章において、まずドビュッシーの《練習曲集》について、作品の成立背景及び初演と影響について基本的な調査を行った。次に、この作品の各校訂版について基本的な調査を行った。ここでドビュッシーの《練習曲集》に対する各出版社の記譜上の特徴と問題点を検討した。フランス系の出版社とドイツ系の出版社は明らかに違う記譜上の習慣を持つことを確認する。

第2章において各出版物と自筆稿について比較検討を行った。比較検討により問題となる部分を資料として制作し検討した。これらは千点を超える部分において、5つの出版物を自筆稿と比較検討を行った。またこの比較検討は5つの出版物においても相互に検討できるよう配慮して作成した。この作業において、ドビュッシーの《練習曲集》について、問題点を具体的に指摘することができた。

第3章では、これらの問題点を解決すべく検討した。基本的に2つの方法により解決を試みた。まず始めに行ったのは、書法や省略による間違いを修正をするために音楽理論による解決を行った。この方法を用いて解決される問題点も多いことが確かめられた。しかし書式上の理論により解決できない問題点が残されることを確認した。

もう一つの解決方法として演奏解釈を取り上げた。演奏解釈は再現芸術に携わるものが経験的に行う方法であるが、この演奏解釈が科学的に根拠を持って行われることは皆無に等しい。科学的に根拠を持つ比較による資料と、正確な演奏技術の認識から推測できる修正を行い、ドビュッシーの《練習曲集》の正確な再現を行うことを試みた。

第4章では、この作業を通じ、書式としての楽譜の存在から、次の段階である再現芸術における楽譜の信頼性とはどこまで保証されているものなのか。またその楽譜としての限界はどこにあるのか、またその楽譜に示された音楽を表現する際、どのような可能性が見込まれるのか。ドビュッシーの《練習曲集》をモデルにとって再現芸術における楽譜の信頼性と可能性を検討するものである。

結論として、ドビュッシーの《練習曲集》の自筆稿、作業稿、自筆稿断片とデュラン原典版、新ドビュッシー全集版、ヘンレー新版、ペータース版、音楽之友社版における比較検討により、現在の楽譜の信頼性における限界点の存在を確認できた。これらは未だ確定的でなく、常に校訂により楽譜の信頼性が向上していることが理解された。校訂作業は地域や時代による音楽文化に多大な影響を受けることを確認した。校訂作業は様々な方法を試みても、最終的に残る問題があることを確認した。最終的に残った問題は楽譜における限界でもあり、また再現芸術における楽譜の可能性でもあることがわかった。そして再現芸術における創造は、楽譜の校訂作業においても作品の価値の創造として必要であることが確認された。